占領されたシリア/抵抗ある限り存続

ティム・アンダーソン

インタナショナリスト 360　2024 年 12 月 28 日

https://libya360.wordpress.com/2024/12/28/the-syrian-nation-is-occupied/

パレスチナやレバノンのレジスタンスが打ちのめされながらも回復しているように、占領されたシリア国家は倒れてはいるが、消えてはいない。

シリアは死んだのではなく、占領されたのだ。NATO の 2 大軍（アメリカとトルコ）にイスラエル、そしてアルカイダを名乗るテロリストの代理人が、2024 年 12 月 8 日以前は国土の 3 分の 1 を占めていたが、現在は 100%を占めている。 国連安保理にリストアップされたテロリストが率いる "暫定 "政府は、地元や国際的な承認を得るまでにはまだ道のりがある。

HTS（ジャバト・アル・ヌスラ、アルカイダ）政権には革命的・民主的な使命はなく、そのスポンサーたちは、テロ組織を民主的な組織のブランドに塗り替えようと躍起になっている。 彼らは（国内に）形だけの協力者を見つけるだろう。 多くのシリア人が生き残るために変身し、場合によっては新体制での役割を見つけようとしている。だが国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）によると、HTS の攻撃で 100 万人が「新たな避難民」となり、汚い戦争から逃れた人々のほとんどは戻っていない。

抵抗を伝えるソーシャルメディア

しかし、アルカイダによる乗っ取りという悲劇を前にして、シリアの価値観が復活している。この現象は、英米のメディアも、トルコやカタールのメディアも報じていない。 ガザにおけるイスラエルの犯罪と同様に、詳細を見つけるには、ソーシャルメディアに目を向けるしかない。そこには（1）アルカイダ政権の犯罪（2）外国による占領を正当化するために使われた、崩壊アサド政権に対する捏造と誇張されたプロパガンダ（3）占領に対する市民的・軍事的抵抗の台頭が報じられている。まさにこの抵抗こそが、シリア国民がまだ生きていることを物語っている。

アサドは去り、彼が戻ってくることは考えられない。 アサドに近かった多くの人々は、あっけない退陣の仕方を苦々しく思っている。 彼は降伏したが、どのような状況で降伏したのかはまだわからない。シリア軍兵士の意思に問題があったわけではなく、最高司令官を含む軍司令部に失敗があったことは明らかだ。 シリア軍兵士のいくつかのグループは、すでに宗派主義テロリストに対してゲリラ的な攻撃を仕掛けている。 これらの勇敢な兵士たちに、政権やアサドの「忠誠者」というレッテルを貼るのはまったくの無知という他ない。

ロシアとイランの役割

アサド政権崩壊に至るロシアとイランの役割について、多くの憶測が飛び交っている。 一部のアナリストは、プーチンがアサドを「裏切った」と述べてい

る。 そのような裏切りの証拠は見当たらないが、（大国の）代理軍と戦うシリア軍へのロシアの支援には、常に「イスラエル」やトルコと直接対決しないという限界があった。イランは 9 月以来、アサド政権に差し迫った脅威を警告し、直接的な援助を申し出たが、アサドはそれを断り、イランと距離を置き、ペルシャ湾のアラブ君主国との間で何らかの経済的な突破口を得ようとした。

アサドは空約束と疑ったのかもしれないが、いずれにせよ、イランの助けを求めなかった。 そのような状況では、イランがシリア軍の代わりに戦うことはできなかった。 シリア軍に近い情報筋によると、アサドは上級指揮官を不可解な形で交代させ、有能な将官を排除したという。 確かに、シリアは多大な経済的圧力にさらされており、抵抗する力も弱まっていたに違いない。 しかし最終的には、シリア軍の失敗がアサドの降伏につながった。同じ理由で、ロシアに関しても、ヘレナ・コバンが最初に出した説明に同意したい。「プーチンは、アサド政権が自分自身を救えなければ、救えないと判断した」のだ。

シリアの人々は現在、生き延びるために HTS の支配に順応しているが、その多くは自分たちが「自由」になり、生活が通常通りになることを望んでいる。アサドへのプロパガンダ戦争が続いているが、シリアを略奪する外国勢力に支えられたアルカイダ率いる政権は、シリア国民にとって最悪の結果だ。 ガザとレバノンで打撃を受けたイスラエルは、シリアで「フリーキック」をし、南部の大部分を占領し、国の主要な防衛インフラを爆撃した。 アサド政権の崩壊は、パレスチナとレバノンのレジスタンスを支える「抵抗の枢軸」にとって大きな後退となった。

続く宗派間戦争と宗派主義の証拠

最初の数日間、西側メディアは、宗派間の暴力は「恐れられていたよりも激しくない」と報じたが、シリア全土で何十件もの宗派間の殺人があった。 HTS 政権による犯罪は、HTS が欧米の支援者たちに新たなイメージを売り込もうとするなか、組織的というよりは散発的に始まった。HTS の宗派主義的性格は変わっていなかった。 （アラブの春の）2011 年当初、カエラは「キリスト教徒はベイルートへ、（アサド政権の）アラウィ派は墓場へ」と唱えたが、2024

年 12 月には、親 HTS 派の群衆が「ホムスはスンニ派のものだ。アラウィ派は出て行け」と叫んだ。

アメリカの国際戦略研究所（CSIS）など西側のシンクタンクは 2023 年に、「HTS のテロリスト集団としての地位は…ますます複雑になっている」として、再ブランド化の準備をした。 ダマスカス陥落後、仏テレビ局の「フランス *24*」は、「西側」は国連安保理にリストアップされたテロリスト集団との「正常化」を視野に入れており、それは「穏健化」したとみなされているからだと解説した。 アサド政権打倒の手助けをした彼等は、アメリカ、トルコ、イスラエルの利益に貢献した。

HTS 政権は、血なまぐさい過去があるが、少数派と女性への「寛容」を約束すると主張し、シリア人はその言明に希望を見出した。 元シリア兵たちは報復を恐れ、新体制に恩赦を求めに出頭したが、 多くが逮捕され、投獄された。

しかし、HTS の犯罪は記録され、公表されている。その一つが 2 人の兵士への攻撃で、彼等は「ヌサイリ（アラウィー）豚」と呼ばれれて殺された。 この例のように、HTS 政権の犯罪を記録するソーシャルメディアアカウントや、抵抗行為を記録したソーシャルメディアアカウントがある。たとえば、

> 現状でもシリアが国家として残っているのは、市民的、武力的な抵抗があるからだ。 *HTS* 軍に対する武装ゲリラ的な攻撃は、海岸やジャブレーとラタキアの間*(12* 月 *14* 日*)*、ダマスカス地方のタルフィタ*(12* 月 *20* 日*)*で行われた。そしてタルトゥスでの元兵士による待ち伏せ攻撃*(12* 月 *25* 日*)*では、*HTS* の戦闘員 *14* 人が死亡、*10* 人が負傷した。ダラアの人々は侵攻してきたイスラエル軍に石を投げつけ、勇敢な群衆はダマスカスのウマヤド広場で、選挙と女性の権利、宗派間攻撃の停止を要求するデモを行った。ロイターは、シリアの「警察」が「騒乱の後」に外出禁止令を出したと報じた。
>
> ホムス、アレッポ、ダマスカスのキリスト教地域、タルトゥスでも、宗派的な政策や慣行に反対するキリスト教徒による同様のデモが行わ

れた。 タルトゥスでは、アサドへの忠誠を誓う古いスローガン（「われわれの魂をわれわれの血とともに」）は、あらゆる宗教宗派の人々によるシリアへの忠誠の誓いとなった。

タルトゥスでのクリスマス攻撃の後、HTS の大規模な援軍が海岸沿いの都市に移動しているのが目撃された。スンニ派の人々がシーア派、アラウィ派、キリスト教徒の抗議者と共に外国人戦闘員の国外追放を要求しているとの報告があった。 HTS のジョラニは、これらの外国人戦闘員にシリア市民権を与える可能性を示唆している。 しかし、NATO が支援する HTS 連合の隊列には、何千人もの外国人過激派が(チェチェン人、ウイグル人、ウズベク人、アフガニスタン人、アルバニア人、ヨーロッパ人)がいる。

制裁の口実となった「偽旗」作戦

西側メディアはアサド政権の犯罪を蒸し返している、ガザ、レバノン、シリアに対するイスラエルの犯罪から目をそらし、HTS ギャングの歴史と犯罪を覆い隠すためだ。私はこれらの主張の多くを 2016 年の著書「シリアに対する汚い戦争」で取り上げた。

簡単に言えば、「（アサド政権による人民）虐殺」は、2012 年にシリアに経済封鎖を課すために使われた「偽旗作戦」（結果を別の個人やグループのせいにする軍事作戦）であり、2013 年から 2018 年にかけての化学兵器（使用）についてのさまざまな主張もすべて「偽旗」であった。 虐待の告発のほとんどは、西側メディアが被害者を「政治的反対勢力」と呼んだが、実は捕虜になったり負傷したりしたテロリストの戦闘員に関するものだった。「集団墓地」は、大規模な作戦で殺害されたテロリストのためのものだった。ガザでイスラエル軍によって殺害された市民や医師のために作られたものとは違うものだった。

ダマスカスの死体安置所の職員「シーザー」が 2014 年に複数の死体の写真を持ってカタールに亡命した悪名高い事件。彼は戦時中の死体安置所の死体はすべて拷問で殺された「反体制派」の囚人だと主張した。 しかし、汚い戦争の

間、シリアに対して常に偽のプロパガンダを行った米国のヒューマン・ライツ・ウォッチでさえ、写真の半数以上が「攻撃、爆発、暗殺未遂で殺害された政府軍兵士、その他の武装戦闘員、民間人」のものであることを認めざるを得なかった。

要するに、シリア軍に対する誇張された主張は、ISIS と HTS の一団による、より悪質で明白な残虐行為を隠すためにおこなわれたものである。 HTS が主導するシリアが国家として承認されることが何を意味するかは興味深い。 もちろん、ワシントンはシリアで勝利した代理人を正当化したいが、そうすれば、複数の国で「テロと戦っている」という主張に反することになる。したがって、HTS と HTS の協力者、少数派から選ばれた個人、そして旧政府からなる弱い連合体の創設がおこなわれるかもしれない。 国連安保理レベルでは、HTS をテロ組織の認定から外して禁止措置を解除するためには全会一致の決定が必要であり、そうでなければ、各国にはシリアへの資産凍結、渡航禁止、武器禁輸が求められる。

過激派主導「政権」の承認へ制約

イランと同盟を結び、パレスチナとレバノンのレジスタンスを支援する独立の意志をもったシリアを破壊する。それがアメリカが望んでいることであり、その任務は、今のところ達成されている。 次に何が起こるか。（a）カダフィ後のリビアのように長期にわたる宗派間の戦闘、あるいは（b）イラクのように弱体な宗派連邦制への国家解体＝になるかもしれない。アメリカとその前進基地「イスラエル」にとっては、いずれの場合も、独立した政治的意思を持つ国家の復活を阻止することが目的である。

シリアの分割計画は、フランスの植民地政権によるものと、アメリカの「新中東」プロジェクトによる選択肢の両方があった。 これらの計画には通常、沿岸部にアラウィー派国家、南部にある種のドルーズ保護領、北東部のクルド人地域、そしてサラフィスト過激派が支配する「スンニ派」ハートランドが含まれていた。しかしそのような分離計画はいま、いくつかの制約をうけている。

第一に、アサド政権後に統一されたシリアの抵抗勢力が、HTS と外国人過激派による支配をある程度弱体化させることができる、第二に、北部の一部に対する（トルコの）エルドアン（大統領）の領土権の主張と、クルド人分離主義者の排除要求、第三に、イスラエルが南部の一部とシリアとレバノンの間の山岳地帯を併合しようとすること、である。 ヌスラ／ISIS／HTS に実質的な支援を提供したトルコ政府軍やイスラエル軍の野心に、HTS 政権が反対する兆候はない。

第四の制約は、2015 年の国連安保理決議 2254 号である。この決議は、シリアの領土保全、「信頼できる、包摂的で非宗教的な統治」、新憲法に続く「自由で公正な選挙」を要求している。地域アラブ諸国は多かれ少なかれこの決議に賛同しており、ロシアや中国も同様である。 国連職員は大国の要求に従って、HTS 政権を「希望の炎」と呼ぶが、国連安保理決議が彼等の国際的な正当性に影響を与えることは確かである。

占領への抵抗がある限り、国家は存続

今のところ、HTS 政権は革命的な権能も民主的な権能も持っていないため、それが得られる前に打倒される可能性がある。たしかにシリア国民には重い負担がかかっている。宗派占領政権は、アメリカとトルコという NATO の 2 大軍とイスラエルに支援されている。国内の国防インフラのほとんどを破壊した。このような政権に、市民戦やゲリラ戦の方法で抵抗できるだろうか。 （疑問は当然だが）、とはいえ、たとえ大きな逆境にあったとしても、抵抗がある間は、国家は存続する。これは他の多くの国で見られたことだ。

イランは、パレスチナとレバノンを支援する「抵抗の枢軸」がイスラエルに対する戦略的・道徳的な高地を維持し、ダマスカス陥落という課題に適応するだろうと考えている。 元イラン人の IRGC 総司令官モフセン・レザエイ少将はシリアの抵抗勢力が急速に台頭するだろうと次のようにいう。「1 年もしないうちに、シリア人は異なる方法で自国の抵抗を復活させ、米国とシオニスト政権とその協力者の邪悪で欺瞞に満ちた計画を無力化するだろう」。

多くのシリア人が、現体制下で生き残るためにあらゆる選択肢を試すことは理解できる。だが、アサド政権崩壊を祝い、「自由シリア」のスローガンに素朴に共感している部外者たちは、イスラエルとアメリカの戦略の勝利に拍手をおくっていることを理解すべきだ。アメリカの戦略は、パレスチナとレバノンのレジスタンスへの主要な供給路を粉砕することにある。イランはかならずその供給ラインを再建するだろう。パレスチナやレバノンのレジスタンスが打ちのめされながらも回復しているように、占領されたシリア国家は、倒れてはいるが、消えたわけではない。（了）

筆者 Tim Anderson は、シドニー拠点の「反覇権研究センター」所長

【翻訳チェック　田中靖宏】